

一次の文章を読み、古典の作品名を答えなさい。(10点×5問)

- (1) 今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

竹取物語

点

- (2) 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

平家物語

- (3) 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

枕草子

- (4) つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

徒然草

- (5) 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとなす。古人も多く旅に死せるあり。

おくのほそ道

二次の古典作品の作者名を下から選び、線でつなぎなさい。(10点×5問)

- (1) 枕草子 松尾芭蕉
(2) 徒然草 兼好法師
(3) おくのほそ道 紫式部
(4) 方丈記 清少納言
(5) 源氏物語 鴨長明



できるだけ漢字で書けるようにしましょう!

歴史的仮名遣いのパターン (10点×10問)

① ぢ ↓ じ

② づ ↓ ず

③ む ↓ ん

④ ゐ ↓ い

⑤ ゑ ↓ え

⑥ を ↓ お

⑦ くわ ↓ か

⑧ 「ア段の音+う (ふ) ↓ 「オ段+う」

さふ ↓ そ
う

⑨ 「イ段の音+う (ふ) ↓ 「イ段+ゆう」

きう ↓ き
ゆ
う

⑩ 「エ段の音+う (ふ) ↓ 「イ段+よう」

てふてふ ↓ ち
よ
う
ち
よ
う

ハ行の仮名は、言葉の頭にあるもの以外、ワ行に変わることも覚えておこう！
(例 あはれ → あわれ)



点

一次のー線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

(1) 今は昔、竹取の翁と①いふものありけり。

① いうもの



点

野山にまじりて竹を取りつつ、②よろづのことに③使ひけり。

② よろず

③ つかいけり

名をば、さぬきのみやつこと④なむいひける。

④ なんいける

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと⑤うつくしうてゐたり。

⑤ うつくしうていたり

(2) 春はあけぼの。⑥やうやう白くなりゆく⑦山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

⑥ ようよう

⑦ やまぎわ

夏は夜。月のころはさらなり、闇も⑧なほ、蛍の多く飛びちがひたる。

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

⑧ なお

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと⑨近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、⑩飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

⑨ ちこうなりたるに

⑩ とびいそぐさえあわれなり

一次の―線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

点

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、①をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ②揺りすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。

陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、③願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を④向かふべからず。いま一度本国へ⑤迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせ⑥たまふな。」

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつびいて⑦ひやうど放つ。小兵と⑧いふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、

⑨ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。

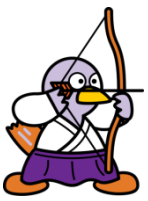
あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、

「御定ぞ、つかまつれ。」
 と言ひければ、今度は中差取つてうちくはせ、よつびいて、しや頸の骨を⑩ひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。平家の方には音もせず、源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。

(「平家物語」による)

① おりふし
 ③ ねがわくは
 ⑤ むかえん
 ⑦ ひようど
 ⑨ ひいふつと

② ゆりすえ
 ④ むこう
 ⑥ たもうな
 ⑧ いうじよう
 ⑩ ひようふつと



一次のー線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

点

これも仁和寺の法師、童の法師に①ならむとする名残とて、各遊ぶことありけるに、②酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、③つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限りなし。

しばし奏でて後、④抜かむとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、⑤いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首の⑥まはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らむとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はで、すべき様なくて、三足なる角の上に、帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師(くすし)の許、率(い)て行きけるに、道すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許(もと)にさし入りて、むかひ⑦居たりけむ有様、さこそ異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教へもなし」といへば、また仁和寺へ帰りて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。

かゝる程に、或者の⑧いふやう、「⑨たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ、たゞ力をたてて引き給へ」とて、藁の蒂(しべ)をまはりにさし入れて、金を隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺(か)けうげながら、抜けにけり。からき命⑩まうけて、久しく病み居たりけり。

(「徒然草」による)

①	ならん	②	よいて
③	つまるように	④	ぬかん
⑤	いかがはせん	⑥	まわり
⑦	いたりけん	⑧	いうよう
⑨	たとい	⑩	もうけて

見たことがない文章でも、歴史的仮名遣いの読み方は一緒だよ。
 大まかな内容を捉えられるようにしよう!



一次の1線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

点

おのれ古典(イニシヘブミ)をとくに、師の説と①たがへること多く、師の説のわるき事あるをば、わきまへいふことも②おほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これ③すなはちわが師の心にて、つねに④をしへられしは、後によき考への出来たらんには、かならずしも師

の説にたがふとて、なほゞかりそとなむ、教へられし、こはいと⑤たふときをしへにて、わが師の、よにすぐれ給へる一つ也、大かた古へを⑥かむかふる事、さらにひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくもあらず、又よき人の説ならんからに、多くの中には、誤りもなかなかからむ、必わるきこともまじらではえあらず、そのおのが心には、今はいにしへのこゝろことごとく明らか也、これをおきては、あるべくもあらずと、思ひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよきかむかへもいでくるわざ也、あまたの手を経(フ)るまにまに、さきざきの考へのうへを、なほよく考へ⑦きはむるからに、つぎつぎにくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず、よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道には、⑧いふかひなきわざ也、又おのが師などのわるきことを⑨いひあらはすは、いとまかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきをしるごなし、師の説なりとして、わるきをしりながら、いはずつゝみかくして、よさまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ⑩たふとみて、道をば思はざる也、宣長は、道を尊み古へを思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古への意のあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけむことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしと、そしらむ人はそしりてよ、そはせんかたなし、われは人にそしられじ、よき人にならむとて、道をまげ、古への意をまげて、さてあるわざはえせずなん、これすなはちわが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや、そはいかにもあれ

(本居宣長「玉勝間」より師の説になづまざる事による)

①	たがえる
③	すなわち
⑤	とうときおしえ
⑦	きわむる
⑨	いいあらわす

②	おおかる
④	おしえられし
⑥	かんこころ
⑧	いうかいなき
⑩	とうとみて



漢文の訓読①

□訓読とは

- ・漢字のみで書かれた原文に送り仮名を補ったり、返り点や句読点を付けたりして、日本語の文章として読めるようにすること。
- ・訓読のために付けるさまざまな符号を**訓点**という。

□訓点の位置

←送り仮名

読 ム
レ 書 ヲ

→返り点



点

① レ点…一つ下の字を読んだから、返って読む。

(20点×2問)

例
2
レ
1

(1) 1 3 2 (2) 3 2 1
レ
レ
レ

② 一・二点…二つ以上離れた下の字を読んだから、返って読む。

(20点×2問)

例
3 1 2
二
一

(1) 1 4 2 3
二
一

(2) 6 2 1 5 3 4
三
レ
二
一

③ 上・下点…一・二点と合わせて使い、二つ以上離れた字を読んだから、返って読む。

(20点×1問)

例
5 3 1 2 4
下
二
一
上

(1) 6 4 2 1 3 5
下
二
レ
一
上

一 訓点にしたがって、四角に読む順番を数字で書き入れなさい。(10点×10問)

点

	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(1)
	7	2	6	5	1	6	4	5	2
	二	レ	三	二	下	二	三		レ
	5	1	1	3	4	3	2	1	1
				レ	二	二	レ		
	6	10	5	2	2	1	1	4	3
	一	下	二	レ				二	レ
	9	3	2	1	3	2	3	2	2
	上				一	一	一		
		8	4	4	6	4	5	3	
		三	レ	一	レ			一	
		4	3	6	5	5			
						上			

- (2) 3
- レ 2
- レ 1

「レ」は、「一・二点」と
「レ点」が合わさったも
のだよ



漢文の訓読②

書き下し文

訓点にしたがって、語順を並びかえ、漢字とひらがなで書いた文章のこと。

□特別な読み方をする字

- ① 「不レ」…書き下し文では「レず」「レざる」と書く。
- ② 「非ズ」…書き下し文では「あらズ」と書く。
- ③ 「可シ」…書き下し文では「べシ」と書く。
- ④ 「於」「干」「而」…置き字。書き下し文には書かない。

一次の訓読文を書き下し文に直さない。(20点×5問)

(1) 読レム 書ラフ

書を読む

(2) 有レレバ 備ヘ 無レシ 憂ヒ

備へ有れば憂ひ無し

(3) 歳 月ハ 不レ 待レタ 人ヲ

歳月は人を待たず

(4) 良 薬ハ 苦シ 於ニ 口ニ

良薬は口に苦し

(5) 不レンバ 入ニラ 虎 穴ニ 不レ 得ニ 虎 子ヲ

虎穴に入らざれば虎子を得ず



特別な読みをする字は、他にも
 ・「勿カレ」(なカレ)
 ・「不能ハ」(あたはず)
 などがあるよ。特に「不」をひらがなで書くことはよく覚えておこう!

点

一書き下し文を参考にして白文に訓点を書き入れなさい。(10点×10問)

(1) 暮に河陽の橋に上る。

暮^ニ上^ル河陽^ノ橋^ニ。

(2) 李下に冠を正さず。

李^ニ下^ニ不^レ正^サ冠^ヲ。

(3) 百聞は一見に如かず。

百聞^ハ不^レ如^カ一見^ニ。

(4) 徳は孤ならず。必ず隣有り。

徳^ハ不^レ孤^{ナラ}。必^ズ有^リ隣^ニ。

(5) 西のかた諸侯を得んとして錦水に棹さす

西^ノ得^{トシテ}諸侯^ヲ一棹^ニ錦水^ニ。

(6) 雲には衣裳を想い 花には容を想う

雲^ニ想^イ衣裳^ヲ一花^ニ想^ウ容^ヲ。

(7) 過ちて改めざる、是を過ちと謂う。

過^{チテ}而^ル不^レ改^メ、是^ヲ謂^ウ過^{チト}矣^ニ。

(8) 故に事の格に合わざる者を言いて杜撰と為す。

故^ニ言^{イテ}事^ノ不^レ合^ワ格^ニ者^ヲ一為^ス杜撰^ト。

(9) 青は之を藍より取りて、藍よりも青く。

青^ハ取^{リテ}之^ヲ一於^リ藍^ニ、而^{シテ}青^ク於^リ藍^{ヨリ}。

(10) 故きを温めて新しきを知れば、以て師為る可し。

温^{メテ}故^{キヲ}而^{シテ}知^{レバ}新^{シキヲ}、可^シ以^テ為^ル師^ト矣^ニ。

点



「矣」も置き字だから、書き下し文には含まれないよ。書き下し文をよく見て、漢字の使われている順番を参考にしよう！